

# かみばろー

平成 17 年 9 月 24 日

第 162 号  
清野新聞社

## ステッセルのピアノ

平成十七年のお盆休みに父の米寿の祝いを行うということで帰郷した。その際、遠軽町留岡で母の実家の道路向かいにある家庭学校を訪れた。幸い子供の頃の遊び場だったという良一叔父が案内してくれることになり、かねてから念願のピアノを見ることができた。

子供の頃、入り口あたりまでは良く遊びに行ったが、奥の方まで入ったのは初めてであった。本館からさらに奥に入った鬱蒼として小高い森の中の礼拝堂にそのピアノはあった。左右に燭台がありアップライトの、むしろ素朴とも言える小さなピアノだった。

このピアノは寺内陸軍大臣から家庭学校に送られたものらしいが、ロシアの将軍「ステッセルのピアノ」ではないかという、曰く因縁、美談があるのである。

話しのあらましは次のような内容である。日露戦争で乃木大将は壮絶な戦死者（一人の息子も戦死）をだしながらも勝利し、水師営で



の会見が行われた。降伏した露軍守備隊の総督がステッセル将軍であった。その時、勝者である乃木大将の真摯な態度と扱いに感謝し、愛馬を送った話とは国定教科書にもあるらしいが、後日、ステッセル婦人からも愛用のピアノが感謝の印として送られたということである。

ではそのピアノが何故遠軽まで来ることになったのか。家庭学校の創立者である「留岡幸助」は新島襄が創設した同志社大学で神学を学んでおり、同じ時期に在籍し当時軍部に顔の利いた「徳富蘇峰」の口添えではないかとも言われている。

実は全国に同じような逸話のあるピアノが4台ある。遠軽家庭学校の他、旭川市の郷土資料館、金沢女子大学、水戸市大場小学校で

ある。遠軽にも自衛隊の基地はあるが、いずれも戦前から軍都といわれ、幾多の戦争で無数の戦死者を出した都市でもある。旭川の第七師団、金沢の第九師団は

日露戦争において乃木將軍の第三軍に加えられ、旅順、奉天の戦いで勝利したとはいえ壊滅的な犠牲者を出したことが知られている。

私が詳細を知る機会となったのは金沢在住時である。旅順攻撃で第九師団が最大の戦死者を出したことからの例のピアノは乃木大将の指示で金沢に送られたという。当時金沢女子大にあったのを地元北国新聞の創立百年記念行事として復元修理され、記念のコンサートを偶々聴く機会があった。音色のことは良くわからないが輪島塗に加賀の金箔を施した素晴らしい細工であった。

また、前後して金沢に縁の五木寛之が同名の本を出したというところで早速購入して読んでみて驚いた。その冒頭に遠軽家庭学校が出てきたのである。

そういわれてみれば、むかし旭川に在住時、柏の伯父が来て、軍隊の将校クラブであった郷土博物館を案内した際にそんなロシアのピアノがあったような、話しを聞いたような記憶がある。

旭川から東京へ、そしてその後偶然にも金沢、水戸へと転勤となり、四力所とも何かの縁と思いつつかは一度見てみたいと考えていたが、いつの間にか十数年の時日が過ぎてしまった。

今回、是非とも訪問し見たかったのには訳があった。五木寛之の



本に「美しい話を必要とする人、理解できる人は、苦しい思い出のある人」との一節が出てきた。

今回父の回想録を編集していて、軍隊や戦争時代の話しにも少し触れているが、今まで父は戦争の話にはあまりしてこなかった。戦後生まれの我々には正直なところ実感できない世界もある。この逸話は日露戦争のことではあるが、もしかして、父なら理解できるのかもしれないと思った。

四台の中で水戸のピアノについては、かなり具体的に解っているようだ。東郷元帥が露軍のバルチック艦隊を破った際、戦艦アリヨール号に積まれていたもので、大正十二年に横須賀の海軍工廠にあったのを同小学校出身の軍人が願いで母校に払い下げられたという。日本海戦にあたり皇帝ニコライ二世から全軍の士気を鼓舞するために主な軍艦にピアノが外賜された。ドイツ製（グロトリアン）の名器、高級品といわれている。